

## 大学生による未来へのかけ橋創造プロジェクト： 静岡県の「大学生が創る未来への羅針盤事業」に参加して

著者	山下 隆之
雑誌名	みんなの大学
巻	19
ページ	10-11
発行年	2017-03-20
出版者	静岡大学地域社会文化研究ネットワークセンター
URL	<a href="http://doi.org/10.14945/00010116">http://doi.org/10.14945/00010116</a>

# 大学生による未来へのかけ橋創造プロジェクト —静岡県の「大学生が創る未来への羅針盤事業」に参加して—

人文社会科学部経済学科 山下 隆之

僕が小学校へ入った頃、「あさま山荘事件」があった。当時の大学生は、社会を変えようとしていて、教員と睨みあったり、警察官を殴打したりしていた。その集大成とも言える事件だ。だけど、彼らは何も変えられなかったから、若者が世の中を変えるのは無理だよということも僕らの世代は学んだ。街中イベントを行ったり、手作りグッズを売ったりしても、地域社会すら変えられない。

でも、自分たちが暮らす社会を正しく知ることが大事。近視眼的な行動は何も生み出さないけれど（むしろ迷惑だ）、将来を冷静に見通す理性は世の中を（少しずつ）良くする可能性がある。上述の体験があるから、『大学生が創る未来への羅針盤事業』を紹介された時は「どうしたものじゃろう」と迷った。でも、目的の「事業を実施する過程で得た知識や成果を踏まえて」という箇所が気になった。僕らが毎日会って

る学生は少子化世代そのものである。少子化をもたらしたのは親世代の責任だけれど、問題を解決しなければならないのはその学生たち自身なのであるから。

学生たちが静岡県『ふじのくに少子化突破戦略の羅針盤』報告書の中で注目したのは、市町別の合計特殊出生率の要因分析において、地域差の大部分が結婚要因で説明できるとする部分であった。「欲が無い」、「恋愛に淡泊」などと指摘される「さとり世代」「ゆとり世代」の彼（女）らが、結婚に知的関心を抱いたのである。静岡県の婚姻件数は減少傾向にあり、その原因の解明が求められている。結婚に関する経済分析を山下ゼミ（理論経済学）が進め、大学生が結婚に抱く意識を上藤一郎ゼミ（経済統計学）が明らかにするという共同研究を進めることとなった。静岡県の婚姻は表のように分類できるが、結婚適齢期人口の女性の県外流出が年々拡大し、



グランシップでのシンポジウム（2017年1月9日）

独身男性が余っている。

成果を順次公開することとし、研究発表とそれを巡る討論会を学内と学外とで計2回行った。学内シンポジウム（2016年11月24日）が静岡新聞で報道されたことが契機となり、学外シンポジウム（2017年1月9日）は静岡第一テレビと静岡朝日テレビの取材を受けた。静岡朝日テレビからはさらにジャーナリストの池上彰氏の番組での独自取材も受けた。しかし、学外からの関心の高さに反して、学内からの関心がいまひとつなのは意外であった。よく言われるように、他人に無関心な世代なのかもしれない。あるいは、若者が少子化問題に関心を寄せないことが予想されるからこそその事業募集であったのかも

しれない。

テレビ取材やヒアリング調査の当日に、お腹が痛くなったり、頭が痛くなったりしてドタキャンする者が続出したのは、ストレスに弱いとされる「ゆとり世代」の特徴かもしれない。他方、土日返上で研究を続ける者も居る。この「残業」（と彼らは呼んでいた）組には、リーダーが居るようで居ない。サボっている者を恨んでいる様子もない。お互いに尊重し合っているようであり、そうした人間関係の在り方は新たな発見であった。意欲や熱意の濃淡に幅が広いのも「さとり世代」の特徴なのかもしれない。非常に勉強になった事業参加であった。

表 静岡県の婚姻パターン

	男性：25～29歳	男性：30～34歳	男性：35～39歳
女性：20～24歳		①	
女性：25～29歳	②		
女性：30～34歳			③

注) 静大生対象の質問紙調査では、③のパターンを理想とする回答が多かった。